外科的処置を行つた牛の黄体囊腫 並びに卵管水腫の一例について

河田 啓一郎・酒 井 保

(北海道大学獣医学部家畜外科学教室)

熊 谷 泰 隆

(石狩地区農業協同組合家畜人工授精所)

1. まえがき

卵巢の疾患のうち卵胞囊腫については古くから多くの研究が行われているが、黄体囊腫に関する報告は極めて少なく、JOEST¹⁾によれば KRUPSKI 及び WILLIAMS がいづれも屠場材料について検索を行つたものをあげている程度にすぎない。また卵管の疾患に関しては、WILLIAMS²⁾, LOMBARD³⁾, ROWSON³⁾ その他多くの研究者^{4,5)}により、不妊牛の数 %~10 数%程度存在することが指摘されている。著者らもさきに発表⁶⁾した如く卵管疎通障害の診断法並びに治療法を研究中であるが、疎通不良のものが相当高頻度に認められている。

今回著者らは、札幌近郊某牧場に於て約2ケ年間不妊を続けた牛で、直腸検査により一側性卵巢囊腫並びに卵管閉鎖と推定し、これを手術的に除去したのち、病理組織学的に検索した結果、黄体囊腫並びに卵管水腫と認めた一例に遭遇したのでその大要を報告する。

2. 患者の繁殖歴と病歴

患者はホルスタイン種、10才の牛で、過去2経産、最後分娩は昭和28年3月12日である。分娩後から手術を行つた29年12月20日に至る間、長期にわたり尿腫及び子宮内膜炎を患い、また黄体遺残症並びに卵巢囊腫を各々3回反覆し、これらの治療法として子宮洗滌、抗生剤などの注入、黄体挫砕またはプベローゲンの注射などを行つた。また一時発情、排卵が認められて子宮の状態も良好であつた期間には、数回人工授精を行つたが、いづれも不受胎に終つた。

An operated case of bovine corpus-luteum-cyst associated with hydrosalpinx. KAWATA, K., T. SAKAI (Veter. Surg., Veter. Med., Univer. Hokkaido) & Y. KUMAGAI (Artificial Breeding Center of Ishikari Agr. Co-op. Federation) *Jap. J. Animal Reprod.* 1, (4).

3. 手術直前の臨床所見

一般症状には著変がなく、思牡狂の症状もなかつた。直腸検査によれば右卵巢は鳩卵大で波動感を認め、壁が厚く、実質は卵管近位端に僅かに存在する程度であり、また左卵巢は拇指頭大で実質のみであつた。右卵管は腹腔端から約5cmに至る間が小指大に肥厚し、硬固であつて、左卵管並びに子宮は著変が認められなかつた。

以上の所見から右卵巢囊腫並びに卵管閉鎖と推定し、右卵巢による受胎は望み得ないので、却つてこれを剔除することによつて左卵巢が活動し始めることを期待して手術を行つた。

4. 手 術

枡場内起立保定とし、型の如く術野を剪毛、消毒、局所麻酔を行つたのち、右上臍部を約15cm縦切開して開腹し、右卵巢及び卵管の肥厚部を創下に牽引し、周囲の血管を結紮したのち、患部を結紮切除した。腹壁は3層縫合を行い、ペニシリン300万単位を注射した。手術時間は約40分であつて、その間一般症状その他に著変は認められなかつた。

5. 手術後の経過

一般症状には著変がなかつたが、1月から3月の間に子宮内膜炎を患い、数回の子宮洗滌を行い治療した。その後定期的な発情を認めたので5月7日本交を行い、それ以来発情がなく、妊娠の希望を抱いたが、7月29日に妊娠鑑定(直検法)を行つたところ不受胎であつて、同時に尿腫及び子宮内膜炎の再発を認めた。

6. 病理学的検索

肉眼的には卵巢はほぼ球形を示し、大きさは27×26×24mm、重さは約10gで、表面には特に異常を認めず、

触感は直腸検査時と同様であつた。断面はほぼ円形で、厚さ 3 mm の鮮明な黄褐色の黄体組織で囲まれた内径 22×17 mm の嚢腫を認め、黄色粘稠性の内容液が充滿していた。卵管は著しく太く、硬固で、断面の直径は腹腔近位端が 8 mm、子宮近位端が 6 mm であつて(正常の 3~4 倍)、網状構造の中に透明な硝子様内容液が認められた。漿膜面はその一部が卵巢嚢と癒着してをり、また全般にわたり線維素が附着していた。

組織学的には、嚢腫壁周囲の毛細血管が強く拡張、充盈し、内壁はやや厚い結合織によつて覆われ、黄体組織の間質には血管が増生し、また周辺部の黄体細胞には空泡形成が認められた。卵管はその周囲の血管が強く充血し、管腔は著しく拡張しており、一部は網状構造を示し、また粘膜上皮細胞には内容液の圧迫による扁平化がみられた。

以上の所見から著者らは本例を黄体嚢腫並びに卵管水腫と診断した。

7. 考 察

1) JOEST¹⁾ は黄体嚢腫を 2 種にわけ、一つは卵胞の排卵後に生じた黄体から成立するもの、他の一つは排卵しない卵胞から成立するものであつて、前者はその後の発情、排卵を妨げないといい、後者は排卵を抑制するが思牡狂の症状を示すことはないとして述べている。本例は臨床所見及び病理所見からみて彼の分類の第 2 群に属するものと考ええる。

2) また WILLIAMS¹⁾ は黄体嚢腫と慢性卵管炎との合併例を報じているが、本例においても卵管水腫の存在を確認した点興味を覚える。

3) なお WILLIAMS¹⁾ は卵管水腫の場合通常卵巢と腹腔端及び卵管間膜との間に癒着が起ると述べ、Row-

SON³⁾ もまた 300 頭の不妊牛のうち 13.3% に重篤な両側性卵管癒着を認めているが、本例においても癒着が存在したことは、これらの所見と一致する。

4) 一方牛の卵巢割去の術式に関しては、古くから成書に記載されているが、本邦においては赤堀⁷⁾ 及び脇本⁸⁾ が卵胞嚢腫の場合に膈式で行つた報告をみる程度である。しかし本例の如き場合は、摘出する部位が比較的広いので開腹による方がより容易であると思われる。

5) 本例の予後については、近く卵管通気及び通色素試験を行つた上で決定したいと考えている。

8. む す び

直腸検査によつて一側性卵巢嚢腫並びに卵管閉鎖と推定した牛について、腹式による卵巢割去術を行い、剔出した材料を病理組織学的に検索した結果、黄体嚢腫並びに卵管水腫を認めた。

稿を終るに臨み御指導を賜つた黒沢先生に深謝の意を表し、併せて病理学的検索に当り種々御教示を戴いた本学部比較病理学教室藤本助教に深く感謝する。

なお本稿は近く *Jap. J. Vet. Res.* にあらためて発表する予定であるから、詳細は同誌を参照願いたい。

(1955. 9. 9 受付)

文 献

- 1) JOEST, E.: *Spez. Pathologische Anatomie d. Haustiere*. Bd. IV. Richard Schoetz, Berlin, 1925.
- 2) LOMBARD, L., B. B. MORGAN & S. H. McNUTT: *Am. J. Vet. Res.* 12, 69, 1951.
- 3) ROWSON, L. E. A.: *Vet. Rec.* 54, 311, 1942.
- 4) AZIZUDIN, I. M.: *Ceylon Vet. J.* 2, 43, 1954.
- 5) Moberg, R.: *Vet. Rec.* 66, 87, 1954.
- 6) 小池(寿)・河田(啓)・酒井(保): 本誌 1, 62, 1955.
- 7) 赤堀(琢): 日獣会誌. 4, 380, 1951.
- 8) 脇本(正): 同誌 6, 441, 1953.